

後記

川合隆男先生は、本年三月をもって本塾法学部を定年退職される。一九六四年四月に法学部助手に就任されているので、実質四〇年の長きにわたって、法学部において研究・教育にご尽力されたわけである。われわれ執筆者一同は、川合先生のご退職に際して、今までの学恩に大変感謝して、この論文集を編集させていただいた。政治学科社会学部門はもとより、社会学研究科に所属する文学部や経済学部 of 教員たち、社会調査論の分野などで他大学で活躍されている研究者たち、川合先生に大学院で薫陶を受けた研究者など多くの者が執筆している。

川合隆男先生の学問の傾向と言うか、テーマは大きくは三つ、細かくは五つくらいに分かれていると言える。第一期は、近代化における発展途上国、後進国などの研究である。特にインドネシアは対象地域となっていた。そして第二期は一九七〇年代くらいから始まる階層や不平等構造に関する研究である。この中には米山桂三先生との共同研究

である「原爆被爆者調査」（一九六五〜六九年）も含まれている。そして、第三期が一九八〇年頃から転機とする「月島調査」研究から社会調査史と社会学史に入っていく転換期である。日本社会学史に入っていくきっかけとなった論文は、『法学研究』に発表された「日本社会学会」の成立とその後の経緯」（一九八八年）という論文であった。日本社会学会設立の年をめぐって、その経緯を明らかにした学史に関する画期的な論文であった、と言える。

昨年、川合隆男先生は『近代日本社会学の展開』を中心とした日本社会学史、社会調査史に関する研究業績によって、慶應義塾大学の福澤賞を受賞された。実に喜ばしい限りである。『近代日本社会学の展開』に続いて、今春には『近代日本における社会調査の軌跡』という大著も出版されることになっている。川合先生は今春から故郷の山形市に戻られる。これからお元気でわれわれ後輩たちに刺激を与え続けていただければ幸いである。

二〇〇四年一月

法学部教授 有末 賢